



ち え の わ

Vol. 14

「胡弓の話」

会員 若林 擴

「胡弓」は辞書に依れば、鼓弓・小弓とも書くそうで、日本独特の構造と奏法を持つ弓奏楽器又は擦弦楽器であり「胡弓」は日本語でもある。従って本来「和胡弓」「大和胡弓」「日本胡弓」「三味線胡弓」と称する必要は無い筈である。

現在「胡弓」の演奏会に行ったら中国の二胡の演奏会だったりするように、「胡弓」という名称は幅広く使われている。中国には「胡弓」という楽器は存在せず、「胡弓」とは構造の全く異なる「二胡」又は「高胡」がある。中国語で「胡弓」といえば、西域民族の弓という意味となり、楽器ではなく武器ということになる。

日本の胡弓の起源は、アラビアのラバブという楽器が元であると考えられ、ラバブはイスラム音楽の代表的な楽器で、西へ伝わってヴァイオリン・ビオラ・チェロ・コントラバス等になった。東は、東南アジア諸国、中国、朝鮮半島、沖縄へと伝わりそれぞれの民族の擦弦楽器として今日に至っている。

日本の胡弓は、千五百年代の後半、沖縄を經由して伝えられ、江戸時代の文献に依れば、南蛮楽器のラヘイカから日本の胡弓が作られたと考えられ、楽器の形態や奏法は中国の二胡の系統ではなく、むしろタイのソーサムサイやインドネシアのルバブ等と似ている。朝鮮の胡弓に似たヘグムは「溪琴」と呼ばれ、琉球の提琴は現在(くーちょー)胡弓とも言う。

胡弓は三味線を小さくした形で、3弦または4弦であり平成になって低音域を拡張させた五弦胡弓が、私の師匠である正派の大師範、胡弓奏者原 一男により考案されている。

胡弓は三味線と異なり駒の位置が胴の上端より約4センチに位置し、3弦胡弓は三角形の頂点及び両端に糸が掛かる。胡弓の胴の表は、猫の皮、裏には犬の皮が張ってあるが、二胡は表に錦蛇の皮が張っており裏は空洞である。

バイオリンや二胡が胴を動かさず、弓の角度を変えて弦を擦るのと異なり、胡弓は胴を回して弦の位置を変え、馬の尻尾の毛に松ヤニを塗布して摩擦を高めた弓で、絹糸の弦を常に水平に擦って演奏する構造である。

多くの擦弦楽器が平行に張られた弦の表面を擦弦して音を出す。二胡は上下に張り渡した二本の金属弦の間

に、一定の張りを与えた弓の毛の弦を挟み込んで、上下に移動させて擦弦し下弦に低音域を上弦に高音域を分担させる。胡弓の弓の毛の弦は大きく弛ませて掛け渡され、毛の弛みを中指と薬指の指先で手繰り、器用にその張りを調節しながら演奏する点が大きく異なる。同じく一定の張りが与えられた弓で弾くモンゴルの馬頭琴の弦は、生きた馬の尻尾からなり、太弦と細弦の2弦である。太弦は約120本、細弦は約80本のフサフサとした毛から出来ているのが他の擦弦楽器の弦と大きく異なる。

富山八尾の「風の盆」で知られている「越中おわら節」の物静かな手踊りが、地方(じかた)の単調な三味線と胡弓の繊細で美しい高音との組み合わせにより、暗闇の中で何とも妖しい情緒を醸し出す。

三味線と胡弓の取り合わせは古くから歌舞伎等でも使われ、「籠釣瓶花街酔醒」の縁切り場で、花魁八橋の「愛想尽かし」に対する治郎左右衛門の口説きの下座音楽に使われて振られた男の哀れを誘う。義太夫節の「壇浦兜軍記」の「阿古屋琴責の段」で「傾城阿古屋」を演ずる女形自身が、真似事ではなく、琴・地唄三味線・胡弓の3つの楽器を舞台の上で実際に演奏して見せるのが見所である。

石村検校が琉球から伝えたとされる「胡弓」は、江戸時代初期では門付け芸の楽器として使用された。その名を取った京都の「銘菓八橋」で有名な八橋検校も胡弓の改良者として伝えられている。

富山八尾の「風の盆」で、「おわら節」の胡弓を私にも弾かせて貰えないでしょうか？

写真は全長約70センチの大きさの三味線の形状をした私の三弦胡弓と馬の尻尾の毛を緩く張った弓であります。(原稿受領 2006.11.30)

